

- I. 原稿募集
- II. 精神医学の哲学—私が辿った道—
- III. 環境と生命と身体—荒川+ギンズの『建築する身体』のまわりで—
- IV. 編集後記

I 原稿募集

日本科学哲学会ニュースレターは、学会員の情報共有のためのオンライン刊行物です。さまざまな研究会の活動、海外の学会の参加報告、ご自分が研究されている分野の最近の研究動向など、情報交換の場として活用していただけると幸いです。ニュースレターに投稿を希望される方は、科学哲学会事務局までご一報ください。

II 精神医学の哲学—私が辿った道—

東京大学医学部附属病院精神神経科 助教
榊原 英輔

今回、私は「精神医学の哲学という分野の現状や歴史、科学哲学や分析哲学との関係」について書いてほしいと依頼を受けたのだが、いざ書き始める段になって、自分が精神医学の哲学の全体像や歴史を系統的には知らないことに気づき、筆が止まってしまった。こういう時は本来、文献を紐解いて勉強するべきなのだろう。だが、それは今後の課題とすることをお許しいただきたい。本稿では代わりに、私自身が辿った道を綴ることで、自分が直接見知っている限りでの精神医学の哲学の現状を伝えたいと思う。

精神医学〈の〉哲学に至るまで

私は医学部の出身であり、哲学の正規の教育を受けたわけではない。しかし、幼少時から哲学的な問題に関心を持ち、大学では大森荘蔵の本に親しみ、大学在学中だった2006年度に一年間自主留年し、野矢茂樹先生、村田純一先生、飯田隆先生の大学院のゼミや、信原幸弘先生の学部の講義を受けて哲学を学び、同世代の院生達の知己を得た。当時関心を持っていたのは、Davidsonの根源的解釈の問題や、Kripkeの意味の懐疑論であり、これらに関しては、成果をいくつかの論文にすることができた。

2008年に医学部を卒業して研修医となり、その後は精神医学の道に進んだ。哲学を学んだ精神科医が、精神医学の哲学に取り組むようになった、というのはこれ以上ないくらい単純なストーリーのように思うかもしれないが、私が精神医学の哲学に取り組むようになるまでには、実は紆余曲折があった。精神科医になった当初、私は自分の哲学的関心を精神医学に結びつけることはできないと考え、哲学は、本業の精神医学とは独立の純粋な趣味として関わっていかうと考えていたのである。そのように考えていたのは、第一に、精神疾患を研究するのは科学の仕事であり、哲学の出番はないと考えていたからであり、第二に、「精神病理学」と呼ばれている哲学的精神医学の研究に対して、当時の私は距離を取りたいと考えていたからである。後に一部修正されることになるのだが、

当時の私は、精神病理学に対し、現象学やポストモダン思想にかぶれた精神科医が、学術的な議論を振りかざす斜陽の業界というイメージを抱いていたのである。私が入局した東京大学の精神神経科の医局は、生物学的精神医学が強く、精神病理学に関して否定的な態度を取る先輩が周囲に多かったことも影響していたかもしれない。

そのような状況に転機が訪れたのは、精神科の専門研修を始めて3年目に、認知行動療法を学ぶ中で、認知行動療法における精神疾患観と、生物学的精神医学における精神疾患観が正反対と言ってよいほどに異なっていることに気づいたときであった。その時私は、個々の精神疾患の病理に触れなくても、精神医療実践の構造を論じることが可能であり、その際に哲学的な素養が役立つという感触を持つことができたのである。この時着想したことは、「認知行動療法家は何をしているのか」という論文にまとめている¹⁾。

仲間との出会い

前述の論文の出版がきっかけとなり、同論文が掲載された『精神医学と哲学の出会い』に寄稿していた田所重紀さん、編著者であった信原幸弘先生との関係を深め、この3名で、精神医学と心理学の哲学 (Philosophy of Psychiatry and Psychology; PPP) 研究会を立ち上げた。PPP研究会の第1回は2013年4月に開催され、その後も基本的に月1回のペースで開催している。現在では鈴木貴之さんにもコアメンバーに加わってもらい、2018年2月には記念すべき第50回目を開催できた。

2013年9月に開催された東京大学と京都大学の精神科で共同開催した若手研究者交流会において(当時私は交流会の幹事の一人だった)、京都大学精神科神経科の植野仙経さんと村井俊哉先生と出会うことができた。村井先生は、Nassir Ghaemiの大著『現代精神医学原論』『現代精神医学のゆくえ』を訳され、村井先生に師事する植野さんも、Rachel Cooperの『精神医学の科学哲学』『DSM5を診断する』の翻訳に中心的に関わる活躍をされている。二人は同じ関心を持つ他の精神科医と共に、京都でFundamentaという精神医学の哲学の研究会を月一回主催しており、これにより精神医学の哲学に取り組む東西2つのグループが繋がったことになる。村井先生や植野さんとは、2016年の科学基礎論学会や、2017年の日本精神神経学会で共にシンポジウムを組み、学術的な交流を続けている。アフリカには「早く行きたいなら一人で、遠くへ行きたいならみんなで行け」という諺があるそうだが、ともに歩む仲間は、私にとってかけがえのない存在である。

妄想論に取り組む

精神医学の哲学のテーマとして、最初に私が妄想の問題に取り組むようになったきっかけは、信原先生が執筆した妄想の論文を批判的に検討したのがきっかけだったと思う。妄想論に没頭するようになったのは、Lisa Bortolottiの*Delusions and Other Irrational Beliefs*という本を読み、強烈な違和感を覚えたからである。この業界で一定の評価を受けている本に自分が違和感を覚えたということは、自分にも新規性のある貢献ができるのではないかと考えたのである。妄想論を選んだもう一つの理由は、妄想は一般的に「訂正不可能な偽なる信念」と定義されるが、反対証拠を突きつけられても訂正されないような不合理な信念はそもそも信念と呼ぶに値するのか、という問題設定が、Davidsonの合理性と命題的態度の帰属をめぐる問題の精神医学における応用問題に他ならなかったからである。ここに来て、ようやく哲学における自分の関心を精神医学の問題に接続できたわけである。

2015年にはBirmingham大学のBortolottiの下に留学していた宮園健吾さんが日本に戻ってきたため、PPP研究会で発表を行ってもらい、宮園さんとも研究において交流するようになった。宮園さんにも多くの助言をもらい、難産ではあったが“*Irrationality and pathology of beliefs*”という論文を出版することができた²⁾。とはいえ、この論文は私の妄想論の半分をなすものであり、残りの半分は、2018年3月の時点でまだ投稿中である。

メッカを探して海外に

日本国内には精神医学の哲学に取り組んでいる人はわずかしかおらず、研究を進めていくためには海外の研究者との連携が不可欠だと考えていた私は、海外の研究者とつながりを作る方法を模索した。

最初に注目したのは、PPP研究会と同じ頭文字の雑誌である *Philosophy, Psychiatry, & Psychology* を刊行している、米国の Association for the Advancement of Philosophy and Psychiatry (AAPP) である。AAPP は 1989 年に設立された、精神医学と哲学の境界領域に取り組む組織であり、毎年開催されているアメリカ精神医学会 (APA) の学術大会に合わせて、同じ開催地で研究会を開催していることを調べ上げた。

2015 年に、医局の先輩と初めて APA の学術大会に行く機会があった私は、AAPP の学会に発表演題を申し込み、AAPP にも参加することにした。残念ながら発表演題は不採用だったが、研究会には参加できた。会では、“Psychiatric disorders are not natural kinds” という論文や関連する著作で有名な Peter Zachar 先生や、雑誌 PPP の編集長をしている John Sadler 先生と知り合い、昼食会では若手の参加者と交流することができた。もう一つ収穫だったのは、Sadler 先生の紹介で、International Network for Philosophy & Psychiatry (INPP) に加えてもらえることになったことである。意外だったのは、AAPP が規模の小さい組織だったことである。研究会は 2 日間にわたって口演演題が組まれていたが、ホテルの一室を借りた一列（一会場）のみの発表であり、参加者も 50 名程度だった。参加者の関心も様々であり、いわゆる分析哲学系のバックグラウンドを持つ人だけでなく、Derrida や Lacan が好きだという人も少なくなかった。

2016 年には、INPP の第 18 回年次大会に参加するために、ブラジルのサンパウロに赴いた。この時は妄想論で演題を応募し、無事採択された。INPP の大会は、半数以上がポルトガル語の発表で、スマートフォンの翻訳機能を使ってタイトルを調べるぐらいしかできなかったが、現象学的な精神病理学の発表が割合としては多いようだった。後で知ったのだが、ブラジル国内の精神病理学会との共同開催という位置づけだったようである。印象的だったのは、ポルトガル語で発表する演者のスライドの中に、突然「人間」という漢字の二文字が大きく映し出された時である。木村敏の影響は、地球の裏側まで届いていたのである。

サンパウロでの収穫は、価値観に基づく実践 (values based practice) の概念を世に広めたことで有名な Bill Fulford 先生にご挨拶でき、自分の発表を聞いてもらいコメントをいただけたことである。また、開催地に近いカンピナス州立大学の精神科医が多く参加しており、同大学の精神科教授の Banzato 先生と知り合うこともできた。奇遇なことに、サンパウロとカンピナス州立大学は私にとって縁のある場所である。というのも、20 年以上前に、宇宙線物理学の研究者であった義理の伯父が、日本とブラジルの交流プログラムに基づいて、サンパウロに赴任し、カンピナス州立大学で教鞭をとっていたことがあるからである。

2017 年には、Oxford 大学で 2 年に 1 回開催される精神医学の哲学のワークショップに参加した。このワークショップは、この分野の指導的立場にある研究者が講義を行い、参加者の間でディスカッションするというものであり、*What is mental disorder* を執筆した Derek Bolton 先生や、精神医学の哲学の草分け的存在である、Jennifer Radden 先生と知り合うことができた。

海外を見てまわり気づいたことは、精神医学の哲学に取り組む研究者は散らばっており、各地にスター研究者がいるにはいるが、どこかに研究の「メッカ」のような場所があるわけではないということである。また、いずれの研究会や学会でも、心の哲学や科学哲学のバックグラウンドを持って精神医学の哲学に取り組んでいる人は少数派だということも分かった。この気づきは、後述するように私が日本国内に目を向けなおす契機となる。

精神疾患論に取り組む

私の考えでは、精神医学の哲学は、科学哲学の応用分野と位置付けられるものと、心の哲学の応

用分野と位置付けられるものの二つの領域に大別することができる。前者における典型的な問いは、「精神疾患とは何か」「精神疾患はどのように分類すべきか」「精神医学における説明とはいかなるものか」といったものであり、精神医学の基本的な枠組みを主題とする抽象度の高い議論が多い。他方、後者における典型的な問いは、「妄想とはいかなる現象か」「依存症において自由意志は損なわれるか」「離人症という現象をどのように理解すべきか」などであり、個々の精神病理現象を心の哲学の中で作り上げられた概念を駆使して分析していく。後者の領域は、心の哲学だけでなく、現象学をバックグラウンドに持つ Louis Saas や Thomas Fuchs などの哲学者も参戦してきている。

私が最初に取り組んだ妄想論は後者の領域に属するが、私が現在どちらの領域に関心を持っているのかと尋ねられたら、「前者に近い」と答えることになるだろう。ただし、科学哲学を下敷きにしているわけではないので、この二分法にはしっくり収まらない部分もある。私は現在、臨床に携わる精神科医として、精神医療実践を哲学的に探究したいと考えている。その際の着目しているのは、精神医療実践の中で様々な意思決定を行わなければならない局面である。例えば、精神科医は、受診してきた人を精神疾患であると診断したりしなかったりする。この判断を妥当なものにするのは何であるのかについて考察は、「精神疾患とは何か？—反本質主義の擁護—」と「反精神医学 anti-psychiatry を振り返ってみる」という二つの論文にまとめることができた^{3),4)}。

さらに現在は、ニューロエンハンスメント (neuroenhancement) の研究に取り組んでいる。ニューロエンハンスメントとは、向精神薬などの医科学的なテクノロジーを、病気を治療するためではなく、健康な人の精神機能をより一層高めるために用いることを指し、その是非をめぐる様々な議論が行われている。私がニューロエンハンスメントに関心を持っているのは、精神医療の現場で今まきに行われている向精神薬を処方する／しないという判断に、ニューロエンハンスメントをめぐる考察が役立つと考えるからである。2017年に日本精神神経学会で精神医学の哲学をテーマとするシンポジウムを開催し（これは同学会史上初のことだと思う）、大きな反響があった。シンポジウムで発表した内容は、「精神科臨床におけるニューロエンハンスメント」というタイトルで出版が予定されている⁵⁾。

日本への回帰

海外にも精神医学の哲学の研究者が集うメッカのような場所は存在しないことを知った私は、日本国内で自分の研究活動を広め、地盤を固めることに力を注ぐようになった。2015年には、精神科医になりたての頃には敬遠していた日本精神病理学会に入会することにした。2016年と2017年には同学会で発表も行った。日本精神病理学会は、AAPPと比べ10倍近く大きな組織であり、国際組織であるINPPと比較しても、規模や学術的水準において遜色はないことが、両者を比較することで初めて分かった。

精神病理学会に参加するようになり、同学会には、現象学やポストモダン思想をバックグラウンドとする発表が多いものの、心の哲学や科学哲学をバックグラウンドとしている研究者もいるということが分かった。その中でも、私よりも前から妄想論に取り組んでいた熊崎努先生、向精神薬の蔓延と疾患喧伝の問題に取り組んでいた井原裕先生、Jaspers や Schneider の伝統的な精神医学からその中核となる思想を明確化した古茶大樹先生、意味連続性を生命の観点から捉えようと試みている豊嶋良一先生と面識を得て、活発に議論を交わすことができるような関係を築けたことは大きな変化だった。

日本は精神病理学の歴史と古典を学ぶのに適した国である。というのも、研究者の層が厚く、独語や仏語で著された精神病理学の古典が、先達によって邦訳され吸収されてきたからである。これらの本の多くは、英語には訳されておらず、英語圏の研究者は容易にはアクセスできないことが多い。これらの古典の中には、精神医学の新しい哲学のアイディアの種が眠っているのではないかと私は考えている。

私たちは、2018年にも精神神経学会で精神医学の哲学のシンポジウムを行う予定である。今後も、

共に歩んでくれる仲間と共に遠くを目指していきたい。

注

- 1) 榎原英輔．認知行動療法家は何をしているのか．中山剛史，信原幸弘編著『精神医学と哲学の出会い：脳と心の精神病理』．玉川大学出版部 2013. p. 36-52.
- 2) Sakakibara E. Irrationality and Pathology of Beliefs. *Neuroethics*. 2016;9(2):147-57.
- 3) 榎原英輔．精神疾患とは何か？—反本質主義の擁護—．科学基礎論研究． 2017;44(1/2):55-75.
- 4) 榎原英輔．反精神医学 anti-psychiatry を振り返ってみる．精神科治療学．2018;33(2):207-12.
- 5) 榎原英輔．精神科臨床におけるニューロエンハンスメント．精神神経学雑誌．印刷中．

Ⅲ

環境と生命と身体と—荒川+ギンズの『建築する身体』のまわりで—

高千穂大学
染谷 昌義

生から死への宿命はひっくり返せる。人間は人間を超えることができる。死ぬのは法律違反である。死なないために！死に対する全面的抵抗・・・Man is mortal, but this destiny is reversible through the architecture against death.

2017年11月初旬のニューヨーク、マンハッタンは、防寒を念頭に身支度をして日本を出た者には汗ばむ陽気だった。ところが、ロングアイランドのイースト・ハンプトンに向かった次の日は、朝から冷えこんだ。道中、ひとかかえもありそうなオレンジ色のカボチャの群れが収穫を待つように畑にならび、すでに収穫を終えたブドウ畑の棚吊が道路脇の木々の間に見え隠れした。秋の気配が十分に漂ってくる。荒川修作とマドリン・ギンズの設計したバイオスクリープハウスへの二度目の訪問だった。バイオスクリープハウスは人が棲むことをいまだに模索している少し荒々しい空間。今回の訪問時は、建築物への第三者機関からの指導もあって、見学者への安全性からキッチン周辺部に柵が設けられ、中心にあるテーブル全体も板で覆われていた。キッチンへ降りる場所にも木の階段が備えつけられ、ハウスがもともと持っている「宿命反転」の屈強さが一部損なわれてしまったようだ。天井の一部も破損していて、ちょっと痛々しい。

2016年4月より「荒川+ギンズの『建築する身体』をめぐる考察」をテーマにした関西大学の研究グループに関わっている。同大の三村尚

彦氏を主幹とする、関西大学東西学術研究所の身体論研究班である。このグループは、芸術家で建築家で詩人でもある荒川修作とマドリン・ギンズの作品と思想をとおして、新しい身体論、それもなんと「22世紀の身体論」を模索し構築することを目指して組織された。グループには、心理療法的一种である体験過程理論の研究者、東西の身体論の比較研究や身体教育学・ボディワーク論の専門家、絵画や映像、建築作品の表象分析を専門とする者、リハビリテーションや精神医学の哲学を研究する者、そして荒川+ギンズ東京事務所の代表も加わっている。パラエティに富んだ多角的アプローチを特色とし、望むらくは思想研究の枠を超えて、荒川+ギンズの「天命反転」プロジェクトそのもののさらなる展開も目論まれている。わたしに与えられた役目は、知覚と行為に対するエコロジカル・アプローチの理論的道具を駆使して、荒川+ギンズの作品や思想をいわば「翻訳」して理解できるようにすること(らしい)。これまでとは勝手が違って、作品や建築物とのエンカウンターをミックスして背後にある思想を言葉化しなければならぬので、楽しみながらもちょい不安げに焦っているところだ。もちろん身体論として勝手な妄想も膨らませてもいるけれど。

すでに研究は2年を経過し、荒川やギンズの残した著書や作品について解釈や検討をするだけではない方向にも進み始めた。荒川とギンズには著作物や作品以外に膨大な資料(蔵書、印刷物、書簡、ノートなど)が残されているが、

それらをアーカイブ化する計画である。そのための話し合いも、ニューヨークの Reversible Destiny Foundation (荒川+ギンズの財団) と行った。昨年 11 月のニューヨーク訪問の第一の目的もそこにあった。どのような資料をどう分類しその後の活用に資する形にするために何をしなければならないか、アーカイブデータを扱う専門家を招いて講義も受けた。当然、そうしたアーカイブ資料を活用してわたし自身にも論文なり発表なりの研究成果が求められる。資料の整理はゆっくりだが始まり、研究はマテリアルなレベルでも進行しつつある。

冒頭に連ねたトンデモな言葉たちは、著作や映像のなかで頻繁に現れる荒川+ギンズらのものだ。荒川+ギンズは、1990 年代中頃から「天命反転 (reversible destiny)」を目指した作品や建築物を作り始める。私たちの共同研究は、もろにトンデモな発言を繰り返すこの時期に焦点を当てている。天命とは大げさな言い方だが、私たちを含めた生命が「死への存在」であることを意味する言葉だ。荒川+ギンズは、天命を文字通り反転・ひっくり返し、死をなくすことが建築物を創作するねらいだと主張したのだった。天命反転を掲げる代表的作品が「遍在の場・奈義の龍安寺・建築する身体」(岡山県、1994 年)、「養老天命反転地」(岐阜県、1995 年)、「三鷹天命反転住宅」(東京、2005 年)、「バイオスクリープハウス」(ニューヨーク、2008 年) である。天命反転を想定する背後には、環境・生命・身体に対する荒川+ギンズの独特の思想が控えていて、それが凝縮された *Architectural Body* (Gins, M. & Arakawa, S., 2002, The University of Alabama Press.)、河本英夫・訳、『建築する身体』春秋社、2004 年) という、エッセイとも詩集ともアフォーリズムとも何とも言わく言い難い著作を読み解くことが理解の鍵ともなっている。

荒川+ギンズが考えていることを荒っぽく言ってしまうと (あくまでも荒っぽくであるが) 環境を人工的に作り変えることによって、人間を不死へと作り変えることができるというものだ。環境を人工的に作り変えることが「建築」の営みであり、それは、行為が着地する場所を用意する作業でもある。建築が用意した場所に呼応して行為は実行される。そうやって、建築という環境は、身体を、そして生命をコントロー

ルする。ここまではいいだろう。エコロジアル・アプローチのアフォーダンスの考え方やエコロジカル情報による運動制御と類似の発想があるし、また生物の作り変えが、環境内での選択過程を通してであるという進化の発想にも通じる。建築は一種の人為選択である。悩ましいのはその先だ。建築という環境には、生命に潜在する力を変容・拡張させ、死を克服するまでに身体を変える力能があるという。「建築する身体」とは建築が用意した場所に降り立ち行為を発動する「身体」のことだが、この身体は環境によって不死へと生まれ変わる可能性を秘めている。だから荒川+ギンズの仕事は、建築物を設計し死に抵抗することだ、とされる。正気の沙汰じゃない!

ためしに三鷹天命反転住宅に行ってみよう。東京都三鷹市大沢のあたり、東八道路を国際基督教大学方面へ進むと、天文台通りとの交差点を通り過ぎてすぐ左手に奇妙な建物が現れる、それだ。地上からそそり立つ太い円柱に、窓のある立方体や円柱が突き出て、外壁が赤、青、緑、オレンジ、黄、ピンクなどのげげげしい色で塗られている。三鷹住宅は、居住者ならずとも日単位で部屋を借りることができるし、定期的に見学会も実施されている。入ってみればわかるが、およそ私たちの慣れ親しんだ住まいとは異なる空間がそこにはある。中心にある柱を円形に囲んでキッチンとテーブルがあって、床を挟んでその周囲に四つの部屋が放射状に配置されている。床には大人の足の裏の土踏まずにちよ



Photo by Ken Kato, courtesy of Arakawa + Gins Tokyo Office. Reversible Destiny Lofts Mitaka - In Memory of Helen Keller, created in 2005 by Arakawa and Madeline Gins, © 2005 Estate of Madeline Gins.



Photo by Ken Kato, courtesy of Arakawa + Gins Tokyo Office.

うどおさまるぐらいの半球状のコブがポコポコと突き出ていて、しかも波打つような起伏がある。洗面所前の床は急な傾斜を作っていて、アキレス腱を伸ばすようにして鏡の前に立たなければならない。トイレには仕切りもない。いやトイレだけでなく部屋の仕切りがそもそもない。壁面を黄色一色に塗られた球体の部屋（本当に球形なのだ）では自分の声の反響が周囲から聞こえる不思議な経験ができる。コンセントや玄関の呼び鈴は斜めに傾いて設置されている。収納がないので、荷物はフックに引っ掛けて天井から吊す。天井も壁も極彩色で塗り分けられ、平らな畳を配した部屋は床から段差のある小上がりようになっていく。室内での行動はバリアだらけ。バリアフリーとは真逆なのである。

アーティストは時にわたしたちには追いつけないスピードで、自ら掴んだものを作品に投じる。荒川+ギンズはそれだけでなく自らの作品に謎めいた言葉もまぶしてくる。作品や建築物の経験を言葉にすることでさえ、わたしにはかなりの勇気がある。さらに「死なないために」を腑に落とすには、勇気に加え壁ぬけのごとき霊験を必要とする。言葉と作品経験を利用してこれまで思いもつかなかった身体のもつ豊かな可能性に思考をめぐらすことができる一方で、死なずに生命であり続けることの矛盾がわたしには実に悩ましいのである。そろそろ正面から迫る

のをやめたほうがよかろう。天命反転を謳っていた荒川も2010年には亡くなった。舌を出しているのかもしれない。ミネルヴァの梟が飛び立つのは黄昏だ。けれど正直に言えば、まだ考えきれていない余白がありそうで気になっている。大言壮語だと片づけられずに、アーティストが企む壮大な実験に興奮しているのも事実なのだ。

「吟味せよ—周囲の環境は、身体的行為の巧みな協調をガイドする。そして、有機体-パーソンは、環境と結びつき、環境とじかにやり取りをする。だから、このような有機体パーソンたるもの、いわゆる人間の宿命から、つまり今後の歩みが定められているかのごとき下り坂から、逃れることができ当然なのである。これから現れる家々や町なみは、有機体-パーソンを建築によってガイドし支え、有機体-パーソンを助け、これまで可能だと思われていたよりもさらに上手に行為を組織し実行させ協調させてくれるだろう。さらには、家や町たちは、有機体-パーソンに、お前たちの種の目的が何なのかという問いかけを、徹底的に建築の問題として問うよう無言で迫るだろう。こうして、建築にガイドされ支えられた有機体-パーソンは、これまで死んでいった膨大な数にのぼる同種メンバーたちの定めとされてきた、あの宿命なるものを反転できるようになる。有機体-パーソンがひたすら無限に続くことが可能になったとき、宿命の反転はまさに成就し完成したことになる。」(Gins and Arakawa, *ibid.*, xx.)

環境や生命や身体を相手に哲学する身としては、ギンズ+荒川からのインストラクションは挑発と挑戦に聞こえる。まだ応えられていない。

今回のニューズレターには、東京大学の榊原英輔さんと高千穂大学の染谷昌義さんのお二人からとても読み応えのある文章をお寄せ頂きました。

榊原さんには、榊原さん自身の目を通した精神医学の哲学の現状をご紹介頂きました。心の哲学や科学哲学をバックグラウンドとする「精神医学の哲学」は、世界的に見てもまだ研究者が決して多いとは言えない「若い」学問分野であることから、心の哲学と科学哲学の単なる応用分野としてではなく、それらの哲学分野と有意義な化学反応を生じさせるような刺激的な分野として発展することも期待されるでしょう。今後の榊原さんの益々の活躍にも期待したいと思います。

染谷さんの文章もまた、建築という科学哲学とはあまり馴染みのない分野、しかも建築物という環境を変化させることによって「死への存在」である人間の天命に抗うという「トンデモ」な思想と科学哲学との出会いを生き生きとした筆致で描いていて、興味をそそられます。そこには何かがありそうだという予感。そんな予感に伴う興奮を感じることができるのも研究の面白さの一つですね。文章には二つの写真も添えられています。興味を持った方は是非、現地まで足を運んでみてはいかがでしょうか。

多忙な中にもかかわらずご寄稿下さったお二方には、改めて心より御礼申し上げたいと思います。

本ニューズレターは、学会員の間での自由な情報交換の場です。SNSでつぶやきたくなるようなちょっと気になることから研究会の紹介やご自分の研究の紹介まで、少しでも研究に関わる内容であればテーマは問いません。多くの皆さんからのご寄稿をお待ちしています！

(金杉武司)